

遥かなる時の中で

「2年生のみなさんへ」
最終号

本日の格言

若い頃、僕の時間は未来へ向けて無限にあるように思えた。今、僕は終末の時間から逆算する。すると、人も風景も、そう、何もかもが違って見えてくる。僕は、疾走する。 —— 蜷川幸雄

自分に合った勉強方法を探して④

何回かに分けて連載してきましたが、今回は最終号です。3月のはじめ、学校が臨時休校になってしまい、先生たちも「何かできることはないか」と話し合いましたが、あまり見つからず…。そんな悔しさの中で、「学校で勉強をすることの一つの意味は、卒業してからも自分自身の力で勉強していく力を身につけること」だと再確認させられたのです。そこで、皆さんが「自分に合った勉強方法」を探すためのヒントになるようにと、この連載が生まれました。ちゃんと読んでくれましたか？

「The・感覚派」のW先生

3D タイプ・ファンタジータイプ・カメラタイプに特化していて、まさに感覚派のW先生。本人も理屈で行動するのは苦手だと自覚しているそうです。ですが、感情豊かで涙もろく、どんなときも生徒の気持ちを尊重できる優しい先生です。旅行が好きで、行った先の景色・気温・においなど、様々な感覚情報を覚えています。よく旅行先で迷子になってしまい、「さっきは猫がいた交差点で曲がったよね」などと発言して家族からあきれられているそうです。



W先生に学ぶ「なりきり」術

中学生時代は教科によって得意・不得意がはっきりしていたというW先生(得意な教科は英語で、苦手な教科は数学でした)。英語は「実際に自分が使っている姿をイメージでき」、「生活に必要な感じるので」一生懸命勉強できたそうです。W先生によると、英語はゲーム感覚で楽しく勉強するのが一番よいと言います。例えば、買い物をする場面の英会話文があるとしたら、その登場人物になりきって会話をすることで、実際に英語で買い物ができる力が身につきます。勉強は、「勉強のための勉強」になってしまってはだめで、身につけた力を使う場面を意識しないと長続きしないと考えているそうです。地理の勉強でも、まるで写真の中に入り込んだかのように現地の暮らしをイメージしたり、国語の勉強なら小説の登場人物にとことん感情移入したりした方が、楽しく勉強することができます。

ラジオタイプかつ辞書タイプのI先生

ラジオタイプがメインで聴覚情報の記憶が得意です。ミュージカルのセリフを覚えるのが好きで、キャスト全員の声マネをしながら再現することができます。中学生時代に暗唱した国語や英語の文章を今でも言うことができます。また、学級通信や論文などの文章を書くことも好きです（この文章も毎日楽しみながら少しずつ書いています）。



中学生時代を振り返ってみると、よく先生から「早くノートを取らないと追いつかないよ」と注意されていました。しかし、複数の作業を同時にこなすことが苦手で、板書を写す作業をしている間は先生の声が頭に入ってこなくなってしまうため、説明に一通り納得できてから板書を写すようにしていました。また、途中からは板書よりもメモの方が大切だと思うようになり、板書を写すことをやめ、先生が話したことをほとんど全部メモするようになっていました（メモを取ることは説明を聞きながらでもできました）。

I先生に学ぶ「音読」術

家庭学習で重視していたのは音読です。黙読や書いて覚えることよりも断然頭に入ってくる感覚があり、何回も音読して基本的にテスト範囲の教科書はすべて覚えてからテストに臨んでいました。大人になって、教員採用試験という人生の山場に挑むときは、スマートフォンに学習指導要領を音読している自分の声を録音して、本を閉じて再生ボタンを押し、録音した声と同時に読み上げられるようになるまで繰り返して練習していました（全文暗記は非効率的なのですが、これくらい執念を見せないといけない時期もあるという一例です）。

ただし、もし昔の自分にアドバイスできるのであれば、もっと「アウトプットの割合を増やせ」と言いたいです。簡単に言うと覚えることがインプットで、問題を解くことがアウトプットなのですが、要はインプットすることを勉強のゴールに設定してはいけないということです。知識は覚えたから意味があるのではなく、「思い出せるから（＝アウトプットできるから）意味がある」のです。また、昔は「インプットしたことはすべてアウトプットできる」と思い込んでいたのですが、それは単純な一問一答のペーパーテストにおいての話であり、大人になると、アウトプットにも色々な形があるということが分かりました（この文章を書いていることもアウトプットですし、授業をすることもそうです）。これからの世の中は「学力」の在り方もだんだんと変わっていくことでしょう。だから、「使える知識」を増やしていくことを勉強のゴールに設定するとよいと思います。

まとめ

認知特性というテーマを切り口として、先生たちの「得意」を生かした勉強方法や、「不得意」を克服した勉強方法などを紹介してきました。冒頭に述べたように、脳科学という学問はまだ未解明の部分が多いのですべてを鵜呑みにしてはいけませんが、授業の受け方一つとっても、人によって大きな違いがあるということが分かったと思います。

定期テストは、学習内容の定着度を確認するためだけのものではありません。勉強方法についての作戦を立てて臨むべきです。その際、万人に当てはまる攻略法のようなものも少しはあるかもしれませんが、自分ならではの勉強方法を自分自身で考え、磨いていくことも必要なのです。「学問に王道なし」という言葉がある通り、今回先生たちが紹介した勉強方法は、自分たちの手で苦勞して確立してきた方法です。皆さんが自分に合った勉強方法を見つけ、磨いていくことを応援しています。